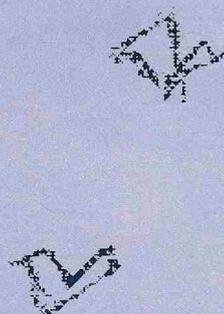


1991/2 No.5

aaqa

日本建築美術工芸協会



CONTENTS

協会設立2周年に当って……………	1
設立2周年記念会及 デザインコンテスト表彰式…………	2
デザインコンテストについて…	3
……………	4
最優秀賞、優秀賞……………	5
準優秀賞……………	6
入賞作品の試作に当って……………	7
現代の華一輪 陣内秀信……………	8
鮎川 透……………	9
TOPICS……………	10
表紙写真 富山市民プラザ・大手通りモール 設計／榎 総合計画事務所 撮影 新建築社 小川泰祐	

協会設立2周年に当って



日本建築美術工芸協会会長
YOSHINOBU ASHIHARA
芦原 義 信



日本建築美術工芸協会理事
TAKEKUNI IKEDA
池 田 武 邦



日本建築美術工芸協会理事
HAJIME DAIDO
大 同 元

この協会は建築家や、美術、工芸にたずさわる多くの専門家が、21世紀に向かってわが国の建築や都市空間をより豊かな文化的環境にしようということで一堂に集ったもので、文化庁より社団法人の認可をうけてから既に二周年を迎えた。その間、事務局も建築会館に移転し、順調に目的に向かって邁進している。

ほぼ毎月、銀座ガスホールで行っているトークは、講演者を囲み、一緒に飲みものをとりながら議論するという極めてユニークな企画である。また、京都、長野で行ったシンポジウムは、植木文化庁長官の基調講演や、会員やゲストスピーカーのパネル・ディスカッションがあり、多くの参加者をえて大変盛会であった。本年は水戸市でシンポジウムを行う企画がある。その他、九州や沖縄の視察旅行も行って、多数の会員の参加をえている。また、講演会、展覧会、年次総会を催したり、なかなか素晴らしい会報も発行している。

この度、第一回の金属によるストリート・ファニチャーのデザインコンテストが行われ、全国から多くの若いデザイナーの応募があった。嘉門安雄副会長が審査委員長となり、選ばれた入選作は法人会員である菊川工業で実際に製作され、建築会館の中庭に展示された。これによって、となく見落されがちながわが国の屋外ベンチ、バス停留所、地下鉄入口、街灯等々のデザインに一般市民の関心が集まることを期待している。

これから、いよいよ節目の時期に入ると考えられるので、更に会員を増強し、それらの多くの人々の支持により、わが国の新しい時代にふさわしい建築・美術・工芸のありかたを模索したいと思う。新年に当り年頭のご挨拶を申述べ、当協会の更に発展することを祈るものである。

近年の著しい科学技術の進歩による技術革新がもたらした社会環境は人類が未だかつて経験しなかったものです。人々は居ながらにして世界中の出来事を視、知ることができます。スイッチ一つで夏を涼しく冬暖かく過ごすことも可能です。

科学技術の進歩が人々に物質的、経済的富と同時に大変便利な環境をつくることに貢献してきたことはまぎれもない事実です。

しかし一方で地球規模での自然環境の破壊、都市生活における精神的ストレスの増大等々人々の精神に関わる環境は物質面とは裏腹に多くの問題を惹き起こしつつあります。

本来建築は住居や街並みの形成をはじめ、人間の生活環境を形づくる大きな要素です。意識するとしないにと拘わらず人々の人格形成に大きな影響を及ぼすものです。その意味で建築は極めて文化的所産であるべき性格のものなのです。

文化はその地域の気候風土、風俗習慣、歴史伝統といったものによってはぐまれ育つもので、極めて地域固有の性格をもっています。普遍的性格をもった科学技術とは著しく異なり、文化圏の違う地域には決して簡単に移転することはできません。この文化が人の心を豊かにする母体となるものです。

ところが近代文明社会は科学技術の急激な発達によって、地域固有の文化的環境をその源となる自然環境同様に著しくないがしろにし、時に抹殺してしまいました。

科学技術に多くを依存している近代建築における重大な課題は人々の人格形成の母体となるこの文化的側面をどのようにして復権し創り出すかということにあるといえます。

まさに文化的所産である美術工芸の建築空間に果たす役割はその意味で極めて重要であります。日本建築美術工芸協会の社会的役割も、とめどなく発達する文明社会が陥る文化的危機に対応し、建築や都市空間をより精神的に豊かな文化的環境にしようということに他なりません。設立されて満2年、着実な第一歩を踏み出したところです。堅実な発展を心から期待して止みません。

かつてない大量のそして深刻な情報を私達は手にしています。現代という特徴がここにあるといえます。恵まれた先進工業社会と多数の飢餓貧困、豊かさを支える効率主義と人々の疲労感あるいは不信、高度技術の無限の可能性と恐るべき自然の破壊、民主主義へのあこがれと民主制の形式化、国家概念の変化と古い国家利益への固執、これらの大きな矛盾の共存をどのように見るべきなのでしょう。人類は進歩しながら退歩しているのでしょうか。

いま「ボーダーレス」、「ファジィ」という言葉がよく使われています。国境の壁がとり払われるだけではなく、仕事と遊びと暮し、これが分かちがたくあいまいに一本化をはじめています。

文化も同じ様に時と場所と形によって変化し新しい形式を生み出し時間をへて次なる文化へとつながって行く、人は更なる豊かさを求めてより高い何物かを求め続けています。文化とはもともと定義づけられないあいまいなものなのでしょうか。

にもかかわらず地球社会が尊重すべきものは何か、その共通の認識はひろがり平和な人間家族をもとめて誠実な努力が全世界で重ねられています。私達がこの動かしえない事実と本来の豊かな人間性によって状況の本質を正しく読み、未来にむけて現実の矛盾をのりこえようとする努力をもちつづけるとき、新しい視野はひらかれ受けつづべき文化と受け渡すべき文化への自信を私たちは手にしうるはずであります。

1991年は三つの〇で、「カルチャー」「コミュニティ」「クリエイティビティ」。物質文明の時をへて新しい価値観が問われている日本社会の中で、私たちは物も貴族、心も貴族の時をむかえようとしています。文化、社会、創造性、三つが重なり合い共鳴し新しい未来を創造して行く、ここでACAの皆さんと更めて共通の認識をもち前進できればと私なりに考えています。

原稿メ切の都合で正月休みに筆をとり少しむづかしく大きな話になりました。新春放談と御許しを願います。最後に、二周年記念本当におめでとうございませぬ。会員の皆様の御健康と御発展を祈りつつ。

設立2周年記念会及びデザインコンテスト表彰式



プリチストン美術館館長
YASUO KAMON
嘉門 安雄

審査を終えて

何ことによらず最初の試みというものは、計画する方も、それに応ずる方も、戸まどいばかり多いことは当然である。

このストリートアート・デザインコンテストも、必要を痛感しての計画ではあるが、どの程度共鳴してもらえるかが最初の気がかりであった。

しかし、幸い予想以上の応募者があり、しかも予想どおり……と言うより、希望どおり若い人たちの応募者が圧倒的に多かった。年齢別にみると、40歳を最高年齢に16歳まで。中でも、17~18歳の高校生が100名以上を数える。如何に若い人たちが街の雰囲気、生活のリズムに夢を抱いているかが解って嬉しかった。特に静岡県から高校生がいわば集団として多数応募してくれたことと、流石にデザイン関係の仕事に従事している若い人の多かったことに、今後の展望の一つの示唆と勇気を与えてくれた。

さて、279点に及ぶ応募図面の審査についての報告だが、まず第一に言えることは、全般的に発想が明るく健康的であったことである。しかも、身近な、そして日常なことへの関心が高く、モチーフも、ベンチが圧倒的に多く、他に、街灯、ダストボックス、ポスト、そしてバス停などが多かった。

しかし、アイデアは面白い、と言うか、頷かせるものがありながら、残念ながら、

図面を作り、作品として仕上げる技術的、構成的な面に、粗雑さ、不安感を抱かせるものも少なくなかった。高校生の作品が量的に多いのに、入賞者が、遊び心が爽やかに発想されている赤股圭子君の佳作のみに終わったのは、その何よりのあらわれである。

入賞者のうち、最優秀賞の加藤圭介君は、如何にも楽しい。実際に図面どおり作って置くとなると、バランス面で一工夫必要だろうが、構成は抜群である。一方、優秀賞の二人は、上田啓行君の緻密と清潔、金田透君の爽やかさ。準優秀賞の中では、私は特に、田原尚道君の着眼の良さに惹かれた。以上、偶然にも20歳台前半の人であるが、30歳台では、2点応募で2点とも入賞の清水泰博君は、やや叙情に流れたことが惜しまれる。



インダストリアルデザイナー
KENJI EKUAN
栄久庵 憲司

美しい路上のエリアをつくるために

上野の杜と言えば西郷さん、西郷さんと言えば上野の杜。西郷隆盛がどんなえらい人だったかは少年にとって知る由もないが、あの大柄な銅像の前にたたずむと何故か心がなごやかになって、母のつくってくれたニギリ飯を西郷さんの雰囲気にもまれてぱくついたものである。歴史的なメモリーがなくてもよい、あたたかさを醸成するもの

があれば人というものとはどんな貧乏暮らしをしていてもホッとするものである。人はやかましくて賑やかだが一人ぼっちになるのも早い。誰かに話しかけたい、誰かから話しかけられたい。そんな時、公園の一隅からじっと見つめている可愛いベンチの順番なのである。



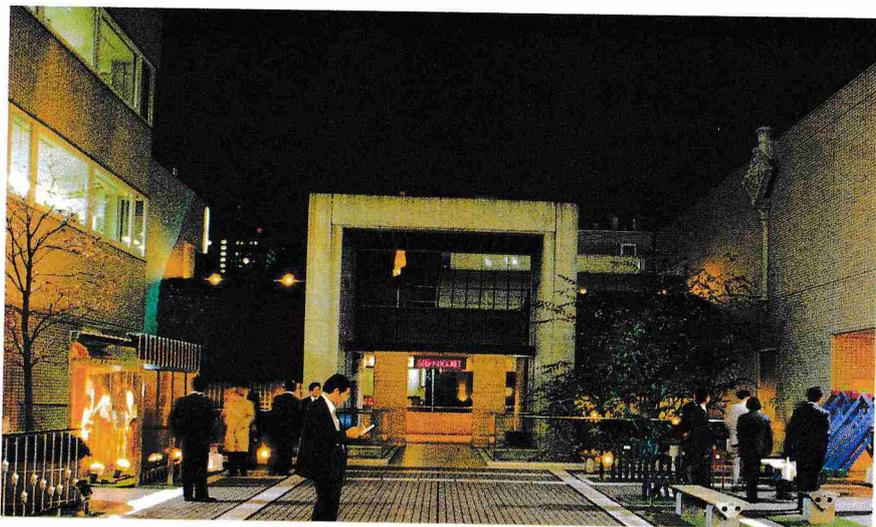
今、東京の町の路上や公園、そして袋小路から一切のベンチや街灯やお地藏さまが消えたらどうだろう。それはそれは寂しいものになってしまう。今回は、誰もがいけるパブリック・スペースで心をなごませ、そして心をたかめるデザインオブジェコンペだった。

まずは第1回とは言え沢山の応募があったことは意を心強くした。わかっているなということである。コンペは運動の一表現だから主催者にとっては「わかっている」ということは最大の喜びである。勿論コンペだから一等二等をつけなくてはならないが、応募参加者全員にこそ賞賛の辞をおくりたい。

最優秀賞には未来への夢があった。かたちがあれば必ずモノになる、そんな図太さがよい。優秀賞2点は、実際につくって見たい気持ちを起こさせる優しくなごやかな作品だった。準優秀賞も佳作も努力のあとが見られる。先にも言ったが運動は継続を必要とする。

継続は力なり、是非二回目も応募して欲しい。今度は主催者のこたえる番だ。

日本の都市は決してほめられたものではない。せめて美しい路上のエリアをつくって行き交う人の心を救って欲しい。





創持デザイン研究所所長
TETSUO MATSUMOTO
松本 哲夫

審査を終わって

現代の都市環境は、非人間とも言える人工物のジャングルとなりつつある。自然破壊のツケを今払わねばならない瀬戸際に立たされているのが、現在の我々なのである。

しかし、その様な状況を認識した上で、今からでも我々の生活環境に変革を起こさせる事が必要であろう。

この様な視点から、今回のデザインコンテストに参加された作品を見ることとした。

全作品の印象は、表現の巧拙はあるもののその考え方の底にある共通点は、人間に対する愛とでも言う様なものを感じた。聴ききれないストリートアートという言葉のもつ意味をうまく捉えた作品が入賞したことになるが、応募者各位の努力に敬意を表したい。

いつも審査をする側に立つと、逆に審査員が応募者に審査されている様に思えてならない。今回も全く同じ状況に立たされた。

最優秀賞となったPOND-SKATERは、メカニズムにやや不安が残るが、その大げさとも思えるサポート機構の動きが、単なる坐具以上のもの、都市環境のアクセントを感じさせてくれる。

優秀賞の2点は、ストリートアートファニチュアに、時間と音を持ちこんだもので、その各々のもつ機能は、人々に楽しさを与えてくれるだろう。

準優秀賞では、造形力と実現性の高い作品が見られた。「街路樹」は、手堅い方法でまとめられ、「都市と川」の橋の欄干も同様で、共に実現したら良いと思われるものであった。「TRIANGLE・COMPOSITION」は、その単純な構成方法が評価できるし、「街路灯」は、室内から街路へ進出した照明器具とも言えるもので、都市の街路をインテリア化させるのに役立つであろう。「BUS・STOP」は、都市景観にやさしさをもたらし、「ENTRANCE TO SUBWAY」は、同様のテーマ作品中では、その造形性に惹かれた。



東京造形大学学長
KYO TOYOGUCHI
豊口 協

審査を通して

公共施設やその環境整備が、重要な社会課題になり始めたのは、そう古い話ではない。

1970年に開かれた大阪万国博会場を訪れた人たちは、多くの外国パビリオンを通して新しい時代の生活環境を目のあたりにし、多くの感動を受けたことを思い出す。

公共施設をみんなの問題として考えてゆこうとする考えかたは、新しい日本の将来をイメージする大きな力になった。

都市における交通機関。バス停のありがたや、地下鉄の乗降口の問題点――。

ごみ箱や灰皿スタンドの配置やサービスの方法――。

国際時代の訪れと共に、その整備と改善は急務となった。

ストリートアート、美しい言葉である。第1回のコンテストに応募された作品を目にしその真剣な創作態度や考えかたに、審査員としての責任の重さを感じる。

中でも、特に心をひかれたのは美しいカーブを描いた“バスストップ”。何気ない素材の生かしかたが快い空間を演出している。

夜と昼と、その24時間の流れを光とともに“都市における木”に託した作品も、見る人の心を引きつける。

子供と生活、楽しさと変化を与えた“メロディ手摺”は、作者のやさしい心がメッセージとして聞こえてくる。

ストリートアートのデザインコンセプト、それは、人を愛し街を愛する心からスタートする。やがて訪れる高齢化社会。より安全な快適な生活環境を創りあげるためにも、このコンテストの意義は大きい。

人工的な造形物が、より人間的な表情を持つとすれば、それはデザインする人間の心のやさしさと思想の深さを意味する。第2回への期待は大きい。



建築家
TAKAHIKO YANAGISAWA
柳澤 孝彦

審査を終えて

この度のコンテストに279点と多くの作品が寄せられたことは、現代の都市環境に対する身近な関心の高さの現われであろう。上位入賞作品はいずれもレベルの高いもので、手近なところからの提案を通して、現代都市への強いコミットメントを読み取るこのことのできるものばかりであった。

最優秀賞 (No.119)：座るために構えている椅子の概念を、自由な可変性でつくり変えてしまう発想が抜群。長く屈曲したアームが、この椅子の浮遊性を表現してユニークである。ジーン・ジェイコブスが言う「都市の生活にシナリオはない」人々の気儘さのための椅子。色々な角度で並ぶアームの造形には、都市的なリズムがあって美しい。

優秀賞 (No.97)：見知らぬ人々の往来を、あたかも舞台の一シーンのごとく切り取ってみせる瞬間の、駒落しのような連続に、都市の新しい風景を立ち上げさせて見事である。洗練された感性のなせる業。

優秀賞 (No.118)：幼い頃の道草の原風景を、現代につくりだそうとするやさしさがあり音を持ち込んだところに夢がある。

準優秀賞 (No.59)：都市の中に木陰のような柔らかい空間を創りだそうとする意図には都市環境への深い思いやりを感じる。確かな構成力で寛容な空間を作りだして秀逸。この作者は佳作にも一点入っていて、それぞれ、力の流れを巧みにデザインした構成力には高いものがある。

準優秀賞 (No.83)：橋の欄干をベンチとしてデザインした発想に注目。金属パイプの繊細でシャープな構成が現代的な感覚を響かせている。横材の構造的安定性には、多少の不安が残る。

準優秀賞 (No.132)：構成要素を直角二等辺三角形のユニットに限定して、デザインに統制をつくりだそうとする意図は、現代の都市に向けたコミットメントである。

準優秀賞 (No.274)：メタルという素材の持つ特性を巧みに造形している。軽やかな力学的緊張感が空間を響かせている。

準優秀賞 (No.254)：街路灯そのもののデザインに終わらずに、緑の街路樹を主役にした都市景観に着目しているところに大きな意味を持つ。

準優秀賞 (No.242)：敢えて機能を表現しないかのような彫刻的表情が魅力的である。その裏にひそかに仕込まれた地下鉄の出入口がある。

その他佳作10点は、それぞれに特色ある作品として選ばれたが、(No.10)や(No.58)などは、公園などの景観に充分順応し調和するといった視座のフィルターを通じての提案である。



菊川工業株式会社
KAZUTOSHI UTSUNO
宇津野 和俊

楽しい空間を創る 作品審査を終わって

第1回メタルワークのストリートアート・デザインコンテストに寄せられた数多くの作品の中で、他の素材ではなかなか表現できないメタルの特性を生かした優秀なデザインが上位に入選した。最優秀賞の加藤圭介さんのPOND-SKATERは、遊戯的

要素をもった動くベンチの着想が良く、設置される場所や数によって、また利用する人によって、さまざまに変化に富んだ表現ができ、今までになかったユニークなベンチで夢がある。優秀賞の上田啓行さんのストリートファニチャーは、二枚のパンチングメタルを用いて時間や季節によって変化する太陽の光の角度や強さによって、また夜の照明の当て方によって様々の表情を持ったもので、パンチングメタルによるモアレ現象の効果とともに、ある時間には突然絵画が浮かび出て、見る方向によってそれぞれが違って見えるもので、メタルの彫刻モニュメント的要素を持つと同時にベンチや電話台を備えた複合的なストリートファニチャーであり、これが置かれた環境は時間とともに変化する大変楽しい空間が出現すると思われる。

同じく優秀賞の金田 透さんの「メロディー手すり」は見るからに夢のある作品で子供たちが走りながら遊んでいる歓声が聞こえてくるようである。メロディーが出る橋の欄干は既に施工されているが、この案の良いところは可動式の重なりによってそれぞれメロディーが変えられるように工夫

されており、その場所で遊ぶ子供たちが自由に新しいメロディーをつくり出す可能性を秘めている。シンプルなデザインであるがなんとなく微笑ましい。準優秀賞の清水泰博さんのURBAN SHELTER「街路樹」は、大きなアールのついたパンチングメタルの傘の下に腰掛けられるサポーターがあり、メタルによって自然の樹の特徴を上手にデザイン化したもので、人々がこのメタルの街路樹の下に集まり語り合い、一時を憩う空間が出来ると思われる。

審査経過

日本美術工芸協会が昭和63年11月に法人設立の許可を得て2年目、美しくゆとりある環境の街づくりを提唱している中で、日頃、芦原会長が強調するストリート・ファニチャーのデザイン見直しということに賛意を示した菊川工業株式会社社長・宇津野和俊氏の提案により今回のデザイン・コンテストの幕開きとなったものである。

1990年(平成2年)5月22日の第2回理事会において「メタルワークのストリートアート&ファニチャーデザインコンテスト」の企画を推進することとした。その際、担当には調査研究委員会(池田武邦委員長)、6名の審査員候補(いずれも会員)、実施期間案等の方針を了承した。



▲ 審査風景

理事会としては「美しくゆとりある環境の街づくりを目指し、その一つとしての街並み構成材を環境にふさわしい美しさと地域の活性化に役立つためのデザインの提案を広く求め、その優秀作品を以て環境の向上に資し、コンテストによって新進デザイナーを発掘したい。具体的には、メタルワーク(ガラス、プラスチック、コンクリート等との複合もよい)の造形美と未来の役割を追求するもの。袖看板やサイン、屋外の設備等ストリートアート&ファニチャーのデザインを求める。」の考えであった。

次の経過を追ってデザインコンテストを実施した。

第1回審査委員会

6月6日(火)午後6時よりホテル・オークラにおいて行う。まず、デザイン・コンテストの実施方針を協議した結果、範囲を限定し応募し易くするために、主題を「メタルワークのストリートアート」とした。

また、応募数の予測や応募しようとする方とのコミュニケーションを図るための応募の申込みという“登録”と“応募”(図面の提出)の2段階とし、かつ、質疑は

行わない。

その他スケジュール、賞金等を協議決定した。

第2回審査委員会

6月13日(火)午後6時より協会会議室にて行う。応募図面のつくり方、提出方法、失格、著作権及び応募デザイン図の取り扱いについて。また、デザインのプロ・アマ共に多くの方からアイデアを得たいので、簡単な図面・スケッチを求めのみにした。作品の審査は部門別に行わないことも協議決定した。

◎第1回のデザインコンテスト実施についての広報を6月26日(火)に行い、関係誌紙にて募集を開始した。

登録(応募の申込み)の締め切りは8月31日(金)、768件の登録があった。応募締め切りの9月11日(火)には279点の図面を受付けた。9月13日(木)には本審査に先立ち279点を有効応募図面とした。(登録者、応募者についての分析をグラフにて示す)

第3回審査委員会

9月17日(月)12時半より協会会議室及び建築会館5階会議室にて開催。第一次から第五次選考を経て入選順位を決定した。

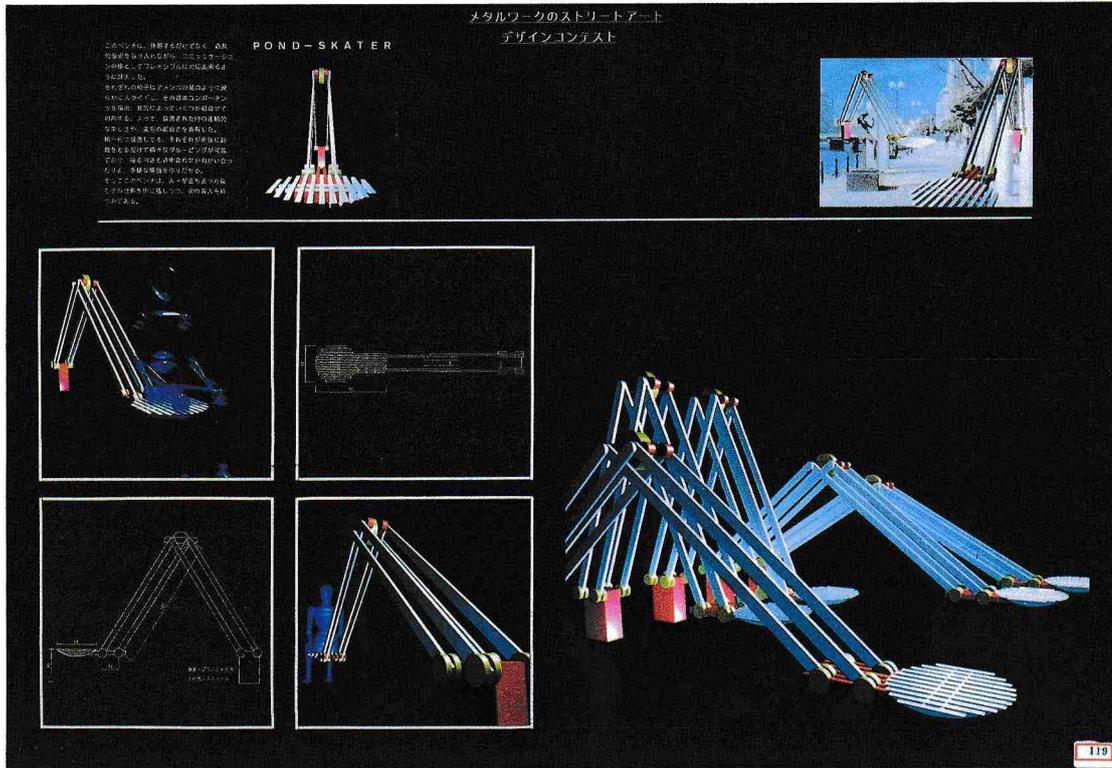
最優秀賞



No.119
POND-SKATER
KEISUKE KATO
加藤 圭介

このベンチは、休憩するだけでなく、遊具的要素を取り入れながら、コミュニケーションの場としてフレキシブルに対応出来るように計画した。
それぞれの椅子はアメンボの足のように滑

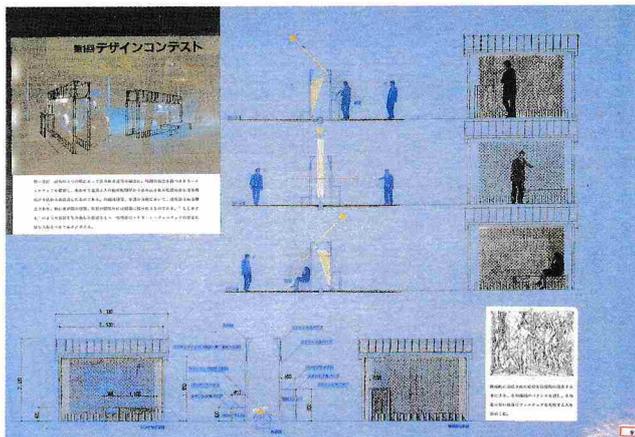
らかにスライドし、その基本コンポーネントを場所、目的によっていくつか組合せて利用する。よって、設置された時の連続的な美しさや、変形の面白さを表現した。横一列に設置しても、それぞれが前後に距離をとるだけで様々なグルーピングが可能であり、座る向きも背中合わせや向かい合ったりと多様な場面を作りだせる。
そしてこのベンチは、人々が立ち去った後もその世界を街に残しつつ、次の客人を待つのである。



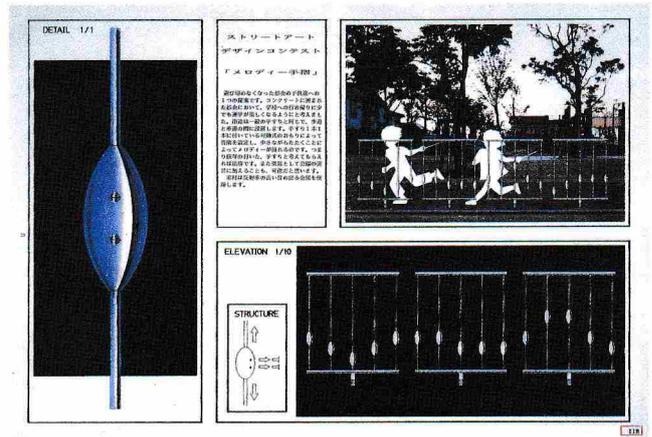
優秀賞



No.97
ストリートファニチュアスクリーン
YOSHIYUKI UEDA
上田 啓行



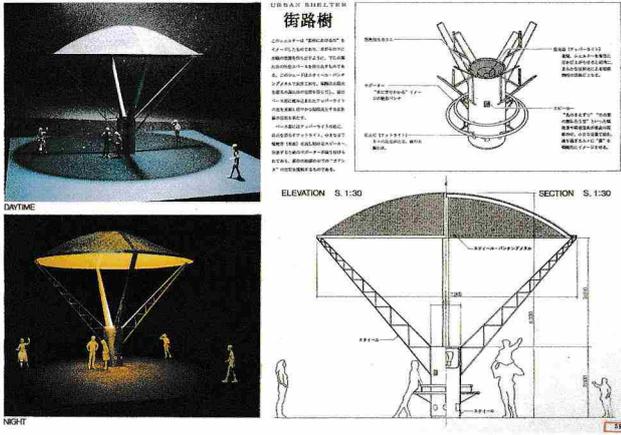
No.118
メロディー手摺
TOURU KANEDA
金田 透



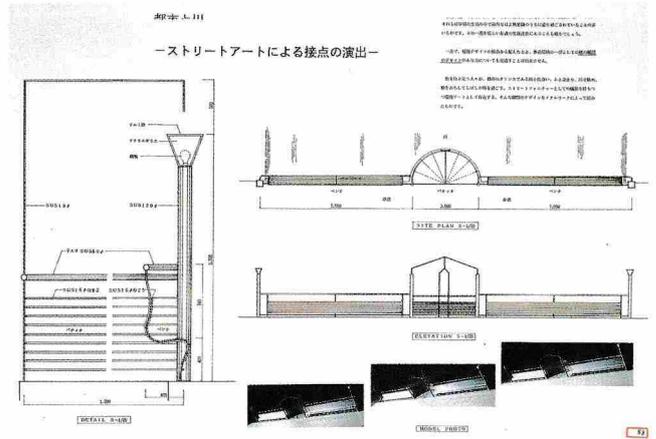
準優秀賞



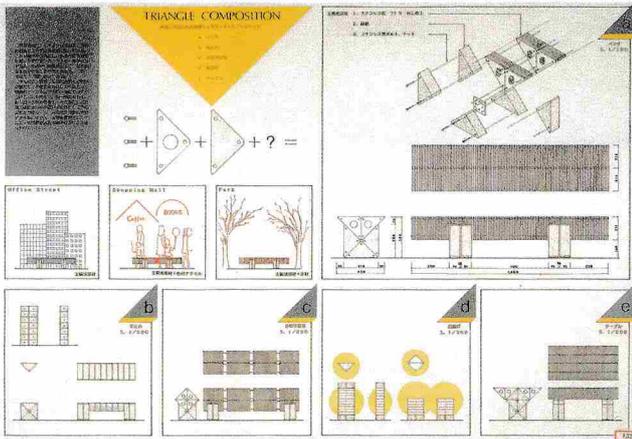
No.59
URBAN SHELTER街路樹
YASUHIRO SHIMIZU
清水 泰博



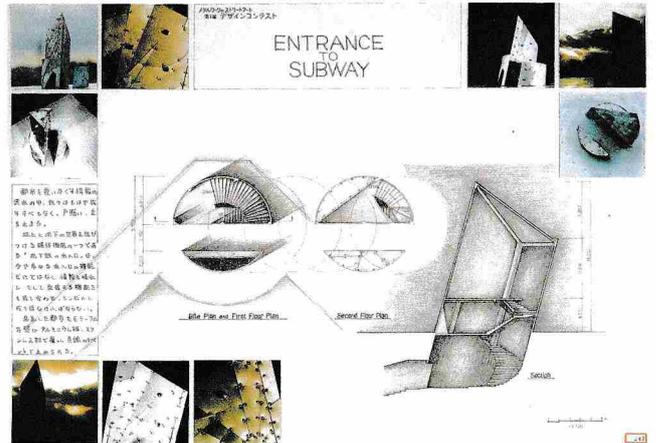
No.83
都市と川
—ストリートアートによる接点の演出—
YASUHIKO YANAGI
柳 泰彦



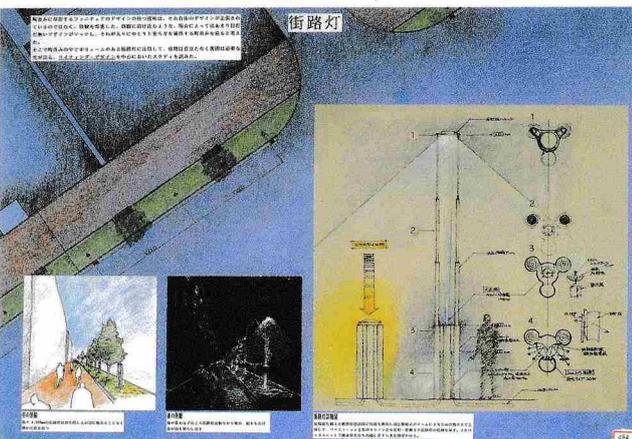
No.132
TRIANGLE COMPOSITION
KAZUHIRO MIYATAKE
宮武 一弘



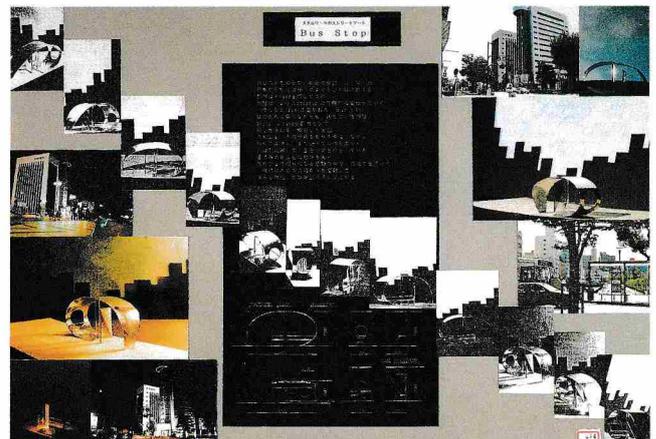
No.242
ENTRANCE SUBWAY
MITSUNORI NISHIYAMA
西山 満規



No.254
街路灯
MASAHIDE KAKUTATE
角 館 政 英 (代表)
RYUICHI SAWADA
澤 田 隆 一



No.274
Bus Stop
HISANAO TAWARA
田 原 尚 直



入賞作品の試作に当って

「ストリートアートデザインコンテスト」の入賞作19作の内、何点かを試作するという話がまとまって、作者の意図、製作期間等を考慮に入れて、試作する作品を選ぶというのが最初の仕事でした。作者のデザインを充分理解した上で機能性や安全性等を付加するために、作者の了解を得ながら、一部素材や形状を変更したものもあります。最優秀賞・加藤さんの「POND-SKATE R」ではアメンボの足の非常に微妙なバランス、動きのスムーズさをだすには大変苦勞しましたが、デザイン図にはないスプ

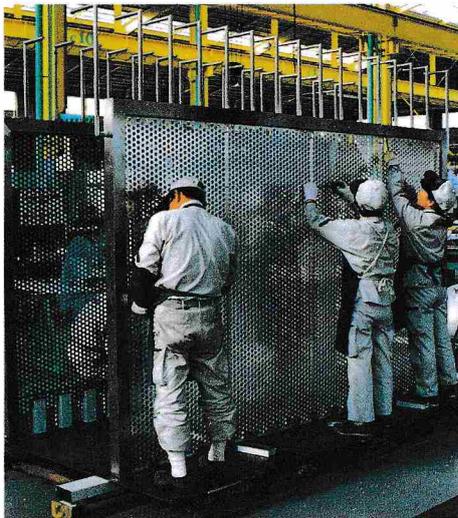
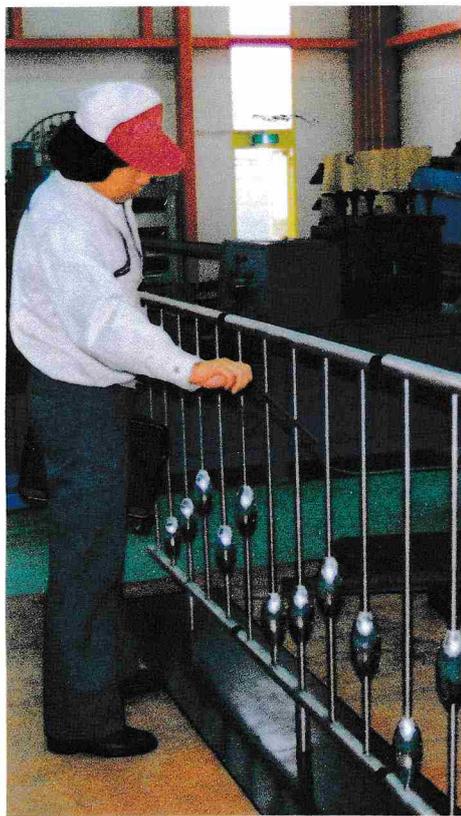
リングやゴムローラーを使用させて頂く事により表現する事が出来ました。

優秀賞・上田さんの「ストリートファニチュア スクリーン」は図面上では意図がよくわからない部分もあったので、上田さんと打合せをしながらデザインイメージをより忠実に具現化するため、パンチングの穴径やその上に描く写真の構図等を決めました。出来上がった作品を「建築会館」での展示中に見学して、上田さんの狙っていた効果、面白さが良く理解出来ました。

準優秀賞・田原さんの「BUS STOP」は

実際に街路に設置してみたい誘惑にかられる程楽しい作品でした。搬入上の問題で $\frac{1}{2}$ のスケールとなりましたが、説得力のある力作だったと思います。通常の仕事もこなしながらの大変忙しい1ヶ月だった半面、若い人達のアイディアに直接触れる事が出来、非常に楽しく充実した時を持てたと思います。最後にこの様なコンテストに参加させて頂くことで、住み良く楽しい街づくりに少しでも役立てたらこれにまさる喜びはありません。

菊川工業(株)テクノプラザ担当者談





法政大学工学部建築学科教授
HIDENOBU JINNAI
陣内 秀信
〒184 小金井市梶野町3-7-2
TEL. 0423-81-5341

モスタールの都市風景

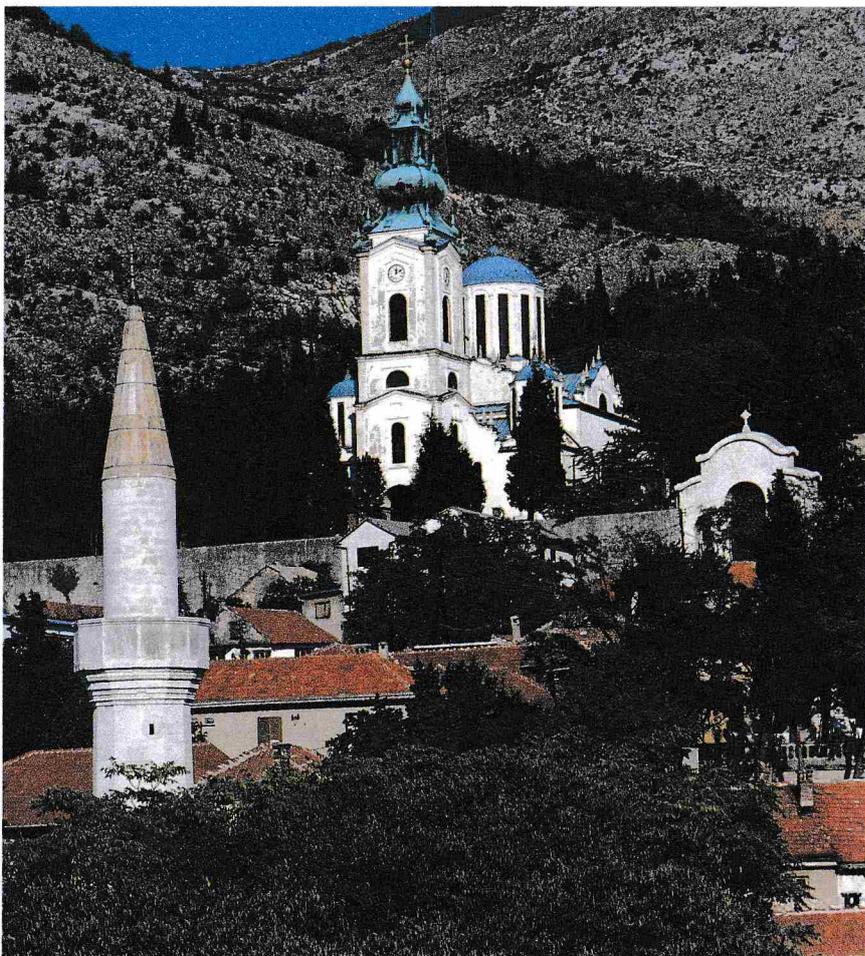
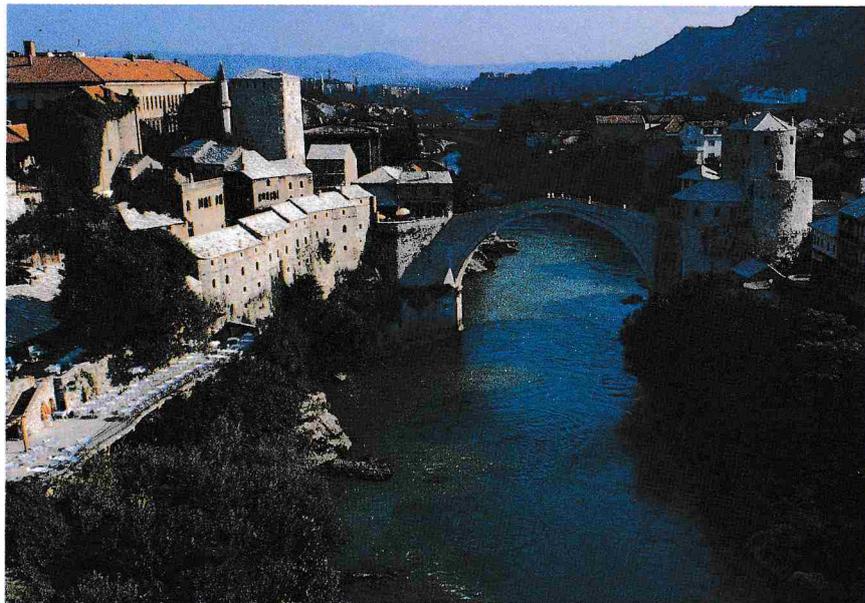
多様な文化が混在するユーゴスラヴィアは、都市風景の変化を楽しむ旅にはもってこいの国である。西のアドリア海沿いには、ヴェネツィアの影響の強い都市が点在するが、内陸部へ入ると、かつてオスマン・トルコが支配したイスラム色の濃い都市風景を目にできる。カトリック教会の鐘楼に代って、モスクの鉛筆のような形をしたミナレットが、町の象徴としてそびえる。

この地域に、まさに絵に描いたように美しい小都市、モスタールがある。山並みをバックとした木々の緑の鮮やかな深い溪谷には、ネレトヴァ川の豊かな水が流れる。青緑の水の色がまた印象的だ。そのダイナミックに広がる溪谷の両側に、イスラム風の都市造形を見せるモスタールの町が広がっている。イスラム都市はどちらかといえば、平地地で見慣れているだけに、モスタールは山あいの西欧都市をエキゾチックにつくりかえたような表情をしていて面白い。

変化にとんだ坂や階段上の道の両側に発達したバザールを抜けると、16世紀にできたこの町最大のモスクに至る。そのミナレットに昇ると、モスタールのパノラマが一望のもとに眺められる。絶景とは、まさにこのことだ。溪谷の水と緑が、白い石灰岩でできた明るい家並と、目に眩いばかりの鮮やかなコントラストをなす。川を見下す崖の上には、カラフルなパラソルを並べたカフェテラスが設けられ、洒落た演出を見せる。

この溪谷をまたいで、実に美しい石のアーチ橋がかかっている。16世紀の半ば、トルコ人の建築家によって見事につけられたものだ。古代から受継がれたオスマン・トルコのアーチの技術が遺憾なく発揮されているのである。

イスラム都市には、他の民族、宗教の人々が混ざって居住することが多い。中心から少しはずれた丘の斜面には、正教会の美しい教会堂の塔が、モスクのミナレットに



はりあうかのようにそびえている。こんな小都市でありながら、歴史の深さと文化の多様性が、その風景の中に見事に表わされているのだ。



株環・設計工房一級建築士事務所
TOURU AYUKAWA
鮎川 透
〒815 福岡市南区大橋2-2-1
TEL. 092-561-6160

今、福岡は……

今福岡が注目されている……らしい。

いや、九州のミニ東京として一極集中の波のなかにあるといったほうがいだろう。

大規模な開発計画が目白押しのなかで、89年に市内の埋立地を使って開催された『アジア太平洋博覧会—福岡'89（よかトピア）』を期に、本家—アジアへの窓口—を宣言するとともに、街が浮足だってきたように思われる。

そんな時期に博覧会の隣接地にて、シーサイドももち住宅環境展が開催された。

マイケル・グレース氏、黒川紀章氏等を始めとする内外の建築家を集めて、住宅・商業施設の建築群を建設し、期間中に一般公開したのちに分譲するというものであった。

その片隅で私は、九州の住宅として一棟担当し、それは和洋混在で木とコンクリートの混構造の戸建住宅とした。

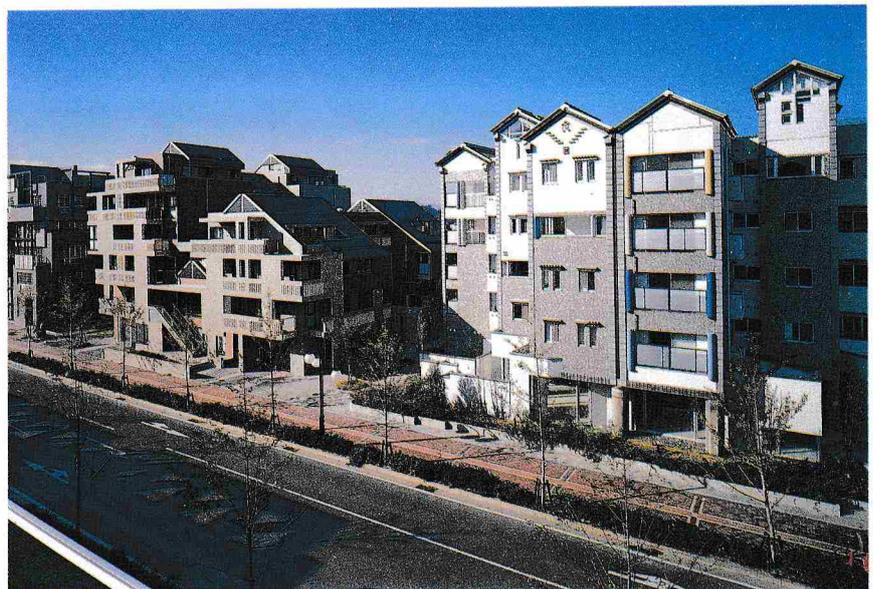
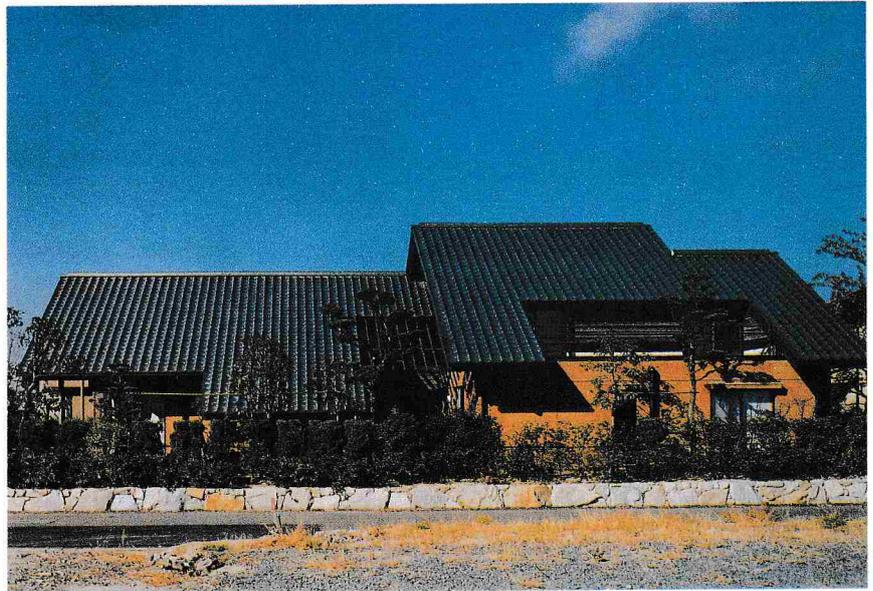
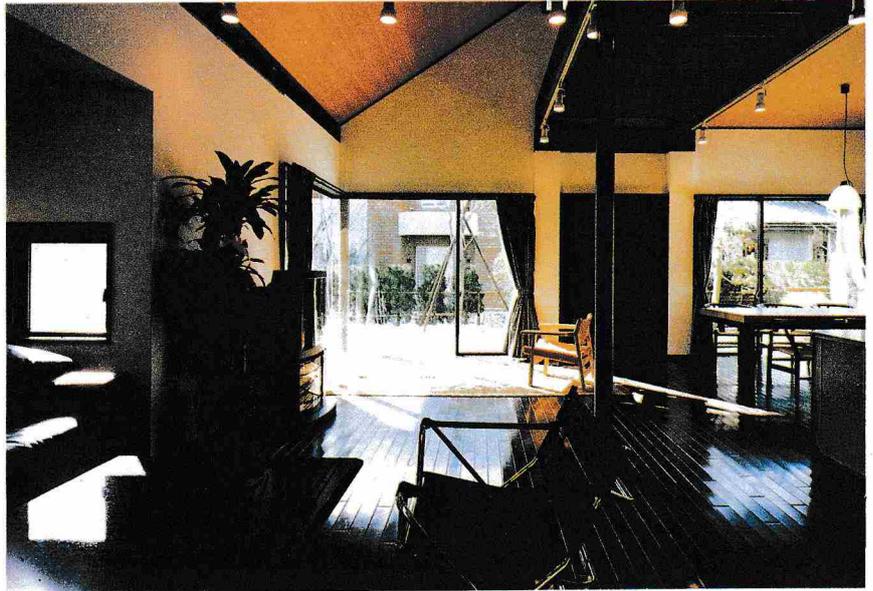
そして昨年、ホテル『イル・パラッツォ』が、アルドロッシ氏設計で竣工し話題をさらったことは記憶に新しい。

さらに現在、地元デベロッパーが磯崎新氏をプロデューサーに起用し、ステイヴン・ホール氏、石山修武氏等、磯崎氏も含めた9人の内外の建築家を集めて、『ネクサスワールド香椎』という集合住宅群の建設が進められている。

それらに共通して言えることは、当然のことながら、既存市街地の中に忽然と舞いおりてきたスペースシップの如く、風景の中では周囲と強く対じた感はある。

しかし、本来都市というのは、様々なものが混じりあって構成されるもので、その雑多さが都市の魅力であり、出来てしまえば都市の一部になってしまうという事実をふまねばならない。

そういう意味において、それらがいい意味でのカオスへの一里塚となるべきであり、そのためには、それにつながる今後の都市活動に携わるものすべてが、都市の魅力とは……と自問しつつ日々の活動を行うことを肝に銘じたい。



1991年・茨城：水戸 シンポジウム

開催日：1991年4月12日(金)
一連のスケジュールとして

①見学会(水戸芸術館) 4月12日(金)午前10時半にJR水戸駅前集合、貸し切りバスにて水戸芸術館及び市内見学。(シンポジウムに間に合うよう終了する)

②シンポジウム 4月12日(金)午後2時～午後5時半

1. 記念講演 午後2時～午後2時50分
演題：「文化の時代とこれからの日本」
講師：文化庁長官 川村恒明

2. シンポジウム 午後3時～午後5時半
(質疑応答時間を含む)

会場：常陽藝文センター (〒310 水戸市三の丸1-5-18)
電話 0292-31-6611(代)

主題：「地域における環境・街なみ
—ポスト水戸市制百年—」

司会 近江栄氏(協会理事・日本大学教授)

パネラー

佐川一信氏(水戸市長)
磯崎 新氏(建築家)
後藤和彦氏(常盤大学教授)
蓑原 敬氏(都市プランナー)
内井昭蔵氏(建築家)
岩田糸子氏(ガラス工芸家)

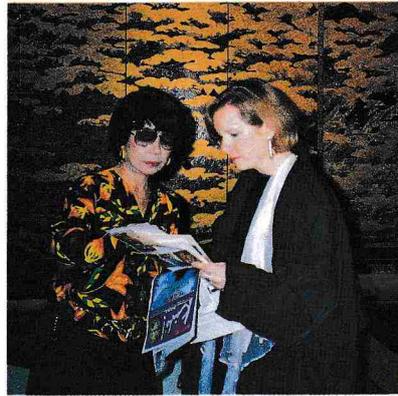
3. 交流会 午後5時半より約1時間、会場周辺の適当な場所を確保して行う。

③懇親ゴルフ会 4月13日(土) 参加者は12日の夜、宿泊施設に集合。

後援(依頼予定)：文化庁・茨城県・水戸市
茨城新聞社・AIJ・JIA
の下部機構・県建築士会
県事務所協会

○平成2年度海外芸術家招へい研修状況

文化庁による標記研修員制度第1回(適用13名)で当協会申請のMs. Paula G. Schumann(アメリカ, 画家。版画・壁画)は1990年12月11日来日、画家・絹谷幸二氏(協会理事、東芸大助教授)並びに画家・高部多恵子氏(協会広報委員)の指導を受けて1991年3月31日まで滞日する。研修テーマは「日本の異なる環境にある人物画・日本人、そして建築と美術・工芸の関わり」である。



▲大塚オーミ陶業(株)工場でのポーラ・シューマンさん
高部多恵子さん

○1991 a. a. c. a. 作品写真展のお知らせ

協会会員(正会員並びに法人会員)が日常業務の中で取り組んでいる、美しくゆとりある環境づくりの一端を写真等にまとめ、世に紹介すると共に会員同士の親睦を高める一つの場にしたい。次のような要項で行う。

会期：1991年3月22日(金)～4月15日(月)

場所：東京ガス(株)銀座ポケットパーク館
2階(東京都中央区銀座7-9-15)

○デザインコンテストの作品公開展 + オープニングワインパーティー

東京ガス(株)新宿ショールームでの公開展は、12月4日(火)～12月20日(休)として実施。12月4日(火)午後6時半から30余名の参加でオープニングパーティーを行った。芦原会長の挨拶後、最優秀賞の加藤圭介氏、準優秀賞の宮武一弘氏らの軽妙な挨拶、そして応募者で選外となった方の特別発言「今回は駄目だったが、ユニークなコンテストなので次回もチャレンジする。第2回は必ずあるのででしょう。またそうして欲しい」の言葉が印象的。

このことに対し、会長から「何とか第2回と言わずに毎年実施するよう努力したい。期待して下さい」といった全額回答のような発言もあった。ついでに「次回は木と石とメタルのストリートアート」かと言った話も。パーティーは大層和やかに、そして大変に盛り上がった。これも東京ガス(株)新宿ショールーム館のフランスワインとフランス人シェフの手になる本場フランス料理(芦原会長も絶賛)の素晴らしい味も加勢したよう。



▲芦原会長の挨拶(写真奥が展示場)

発行：(株)日本建築美術工芸協会

Phone 03-3457-7998

Fax 03-3457-1598

〒108 東京都港区芝5-26-20

建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会

柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)

大多了介、小玉 功、岡山小夜子

高部多恵子、玉見 満、土屋 巖

製作協力：(株)SP建材エージェンシー

創造の「手」と「感性」で メタルワークの新しい可能性を追求する

産業界のあらゆる側面で、コンピュータをはじめとするハード&ソフトのハイテク化が進む一方で、人の個性や感性といったよりヒューマンなぬぐもりが求められている現在、私ども菊川工業は、建築部門におけるメタルエンジニアリングの理想を目指し、職人の手わざを継承しつつ、現代技術との融合を図っています。そのひとつが職人の卓越した技術をシステムティックに統合した大規模な「メタル工房」…ここからは、単なる金属加工物でない、「工業と芸術の接点」あるいは、「機能と官能との交点」とも言うべき文化的価値を秘めた作品が生まれてくると大きな期待を集めています。金属の持つ可能性を最大限に引き出し、創造的な感性と技術で建築界に更なるエポックを作りだそうとしております。



菊川工業株式会社

本社 ● 東京都墨田区菊川 2-18-10 ☎03-3634-3231 〒130
 第1・2部 ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎0474-92-0141 〒270-14
 菊川金属工業株 ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎0474-92-1141 〒270-14
 キクカワM&E株 ● 大阪市西区北堀江 2-9-20-102 ☎06-535-4381 〒550
 テクノ・プラザ ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎0474-92-0141 〒270-14



高知市立 自由民権記念館

レリーフ仕様 材質・ブロンズキャスト 仕上・古美仕上
 建設地 高知市
 設計監理 株式会社 日建設計
 施工 株鴻池組・新進建設工事共同企業体
 レリーフ作家 一色 邦彦

TOTAL LIFE ENGINEERING

21世紀へ 豊かさを深める——とうきゅうグループ



Bunkamura

TOKYO・SHIBUYA



東急建設株式会社

〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
 渋谷地下鉄ビル TEL.03(3406)5111

For a Lively World

人のいきいき、 創造したい。



新しいTAISEIが、動き始めています。めざましいのは、「人がいきいきとする環境の創造」。都市機能の充実や、暮らしのさまざまなステージづくりをはじめ、幅広い領域を活性化し、そこに生きる人びとがはつらつとして生活できる環境づくりがテーマです。自然と人間が心地よく共存するための確かな技術と柔軟な発想で、21世紀の地球環境にチャレンジするTAISEI。今日も街に、人に、いきいきとした風をおくり続けています。

本社 〒163 東京都新宿区西新宿 1-25-1

大成建設株式会社